

第6分科会

「子どもの発達を踏まえた 指導法の工夫」

助言者	味園 佳奈 (鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻主任 准教授)
司会者	川迫美由紀 (共研幼稚園)
問題提起者	山田 桃佳 (鴨池幼稚園)
記録者	長友 愛 (鴨池幼稚園)
記録者	久保紫緒里 (鴨池幼稚園)
運営委員	福留 明人 (鴨池しらうめ幼稚園)

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

乳幼児期は、子どもの健全な心身の発達を図りつつ、生涯にわたる人格の基盤を形成する大事な時期である。子どもをしっかりと捉え、正しく理解することは、保育者に求められる資質・能力の基礎となる、重要な内容となる。

子どもは、人的・物的それぞれの環境との相互の関わりの中で、自分の興味・関心や欲求について、体験を通して人格形成の基礎となる豊かな心情を育み、物事に関わろうとする意欲や健全な生活を営むために必要な態度を養い、多くのことを学びながら心身を発達させる。

そのためには、乳幼児期や学童期を経て大人へと成長する、生涯にわたる発達の道筋を、理論から丁寧に学びなおすことが大切である。それと同時に、その理論を実践化するために、各要領を加味しながらの子ども理解でなくてはならない。加えて、乳児の発達・育ちの理解も欠かせなくなってきたおり、もとより発達の全体像を見据えた上での保育実践であることが重要である。

また、乳児保育から幼児期への連続性を捉え、それを全職員が共通理解することも重要となっている。

保育者には、子ども理解につながる様々な記録の工夫や、子どもの成長・発達を可視化し、それを基に保育者同士で話し合い、子どもの多様な考え方に寄り添いながら、多面的に子どもの姿を捉えいく姿勢が重要と言える。

以上のことから、「子どもの発達を踏まえた指導法の工夫」をすることにより、乳児期から幼児期、そして学童期へと連続性を意識した教育・保育の研究に努めていきたい。

【研究・研修の手がかり】

- (1) 「3つの視点」「5領域」「3つの資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「子どもの発達の特徴と連続性」「環境構成」「個への支援等」についての理解を深める。
- (2) 子どもの発達の連続性が意識できるよう、乳児期から年齢ごとに研究保育等を累積する。
そして、子どもの発達段階に即した指導法（環境構成・全体や個への関わり等）について検証する。
- (3) 研究保育の成果と課題を明確にしてまとめる。

【研究計画】

(令和6年度)

- ・ 子どもの発達段階や実態の把握を踏まえ、指導法（環境構成・全体や個への関わり等）を工夫した取組みをすることにより、一人一人の子どもに寄り添う教育・保育の充実を図る。

(令和7年度)

- ・ 子どもの発達の連続性や小学校への教育・保育の接続についての研究を深める。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマの捉え方

乳幼児期の教育及び保育においては、子どもの発達や学びの個人差に留意しながら、「3つの視点」「5領域」のねらい及び内容に基づいて日々の教育・保育を推進していくことが求められている。

本園保育教諭の自己評価においても「子どもの発達の連続性、接続を意識した教育課程が実施ができたか」の項目の評価点が低い。

上記から、乳児期から幼児期のねらいや内容の把握、子どもの発達の実態把握を確かに行い、「子どもの発達を踏まえた日々の指導法の工夫」を行うことが、本園が取り組むべき重要な課題である。

そのためには、日々の活動場面から子どもの育ちを具体的な姿として明らかにし、よりよい教育・保育を進めるための環境構成や保育教諭の関わり、子ども同士の関わり等最適化を追求する必要がある。

したがって、本園では子どもの発達や実態を踏まえ、乳幼児期から幼児期の指導法を追求することにした。

(2) 研究の内容

ア 子ども発達の实態や連続性が意識できるよう、乳児期から年齢ごとに研究保育等を実施し、子どもの発達や実態を明らかにする。

イ 子ども発達の实態に即した指導法を追求する。

(環境構成・全体や個に応じた指導法の工夫)

(3) 研究の方法

ア 教育・保育指導案事前検討会で、研究の視点や参観の観点を確認する。

指導案に基づく説明 ➡ 観点別保育参観 ➡ ワークショップ型協議 (KJ法等)

イ 研究保育を基に、共通実践化を図る。

振り返りシート ➡ 課題の共有化・実践事項の確認

(4) 実践例

ア 個の実態に応じた手立て・工夫例 (0・1歳児)

イ クラス全体の発達に応じた手立て・工夫例

(5) まとめ

ア 乳児期から幼児期までの年齢別の研究保育を通すことにより、子どもの発達や実態を子どもの活動の姿から明らかにすることができた。(環境構成や教材の選定、導入の工夫の重要性を改めて感じた。)

イ 子ども発達の实態が明らかになるにつれて、発達の個の実態を意識した教育・保育が進められるようになってきた。

(6) 今後の課題

ア 乳幼児期から幼児期までの年齢別の研究保育や子どもの発達や個の実態を意識した日々の教育・保育を行うことで、発達段階や個の実態をさらに確かなものとしていく。

イ 子ども活動の姿を写真や図式化等で可視化することで、子どもの発達等子ども理解をより確かなものとしていく。

ウ 子ども発達の实態をよりより確かにすることで、日々の教育・保育(環境構成、全体や個への関わり等)を工夫・改善していく。

【討議の柱】

- ・ 子どもの発達や実態をどのようにとらえているか。
- ・ 子どもの発達や実態に即した指導の在り方はどうあればよいか。

【問題提起に関する質疑応答】

質問① 振り返りシートを通して、保育の内容や子どもの成長について共有しているのか。

回答 ・研究保育を行う対象の年齢に応じて、振り返りシートの内容は変えており、例として年長の研究保育の振り返りシートには、グループ活動が主であったため、グループ内の会話を観察し、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿に当てはめ、保育の振り返りを行った。また、振り返りシートに記入をして共有することで、資料にも残るため今後の参考資料にもなる。

質問② 0・1歳児の研究保育の今後の保育の流れとして、色氷遊びとあったが他にどのような活動を行ったのか。

回答 ・色氷遊びの他に、小麦粉粘土遊びや全身を使って絵の具を使うフィンガーペイント遊びを行った。

質問③ 子どもの成長発達を捉えながら研究保育を計画し、事前検討会は各学年で行っているが、全学年で行うことはあったか。

回答 ・事前検討会は、全職員で行うということがなかなかできず課題となる部分であるが、正規の職員は職員研修を行うため、そこで事前検討会を行う。各学年2クラスずつあるため、研究保育を行う保育教諭ともう一つのクラスの保育教諭がファシリテーター（司会）となり事前検討会を進めていく。研究保育の指導案を全員で検討し、意見を出し合ってもう一度指導案を作成し、当日保育を行った。

参観方法は、保育を行うクラスの課題を重点的に観察できるようにした。例えば、年長の研究保育ではグループでの活動が主だったため、観察をする保育教諭がグループでの会話を各グループ分かれて担当し観察するように行った。他の学年の課題は、言葉が出ない子どもを特に観察して欲しい、個別の支援を必要とする子どもを見てほしい、などクラスによって参観方法が異なった。普段の保育の中では見ることのできない細かい子どもの姿に気付けるような研究保育になるよう参観方法も各学年、各クラスで工夫をした。

【助言者のまとめ】

○子ども理解

- ・乳幼児期の子どもたちは、様々な「ひと・もの・こと」に出会いかわりながら学ぶことで、心身の発達を助長していく。
- ・環境とのかかわりの中で、主体的・対話的で深い学びの実現が求められている。
- ・保育者自身が子どもたち一人一人の育ち・経験をしっかりと捉え、相応しい環境を整えることが求められる。

○幼児期の発達の特性

- ・幼児期は、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、この時期にふさわしい生活を営むために必要なことを培われる時期である。
- ・「ひと・もの・こと」と出会い、かかわる姿からつぶやきや表情等を見て、何が育っているのか、何が育ちつつある過程にあるのかを、考えていくことが必要不可欠である。
- ・保育者も環境の一部である。子どもたちが「やりたい」と思える環境を作ることが大切である。
- ・「ひと・もの・こと」が、意図的・計画的に構成できているかが大きな鍵となる。一人一人が自ら周囲の環境にかかわれるようにしていくことが重要である。
- ・幼児期の発達の特性は、経験を通して成長することである。

○経験とは

- ・経験とは環境との相互作用である。
- ・子どもにとっては、遊ぶこと自体が目的である。遊びには自己決定、自己選択、自己実現の機会が豊富に与えられる。子どもたちは遊びを通して達成感・自己肯定感を高めていき、自分づくりの原点である主体性の源が作られていく。
- ・「保育者が意図的・計画的に構成した環境は、子どもたちのやりたいことが保障されている環境なのか」これがフィードバックの視点となる。
- ・「対象とのかかわりを通して、子どもは何を経験するのか」保育者が対象の持つ特性を知ることにより、子どもの経験も広がり深まる。
- ・保育の中で、子どもたちの経験を保育者がどのように意味付けるかが大切である。
- ・各々の子どもの経験を家庭にも伝えることで、保育や子育て支援の参考となったり、子どもの育ちを家庭と一緒に喜び合ったりするという関係を作っていく必要がある。遊びを通して、子どもたちの心が育まれていくということが、幼児期の教育で大切であると保護者に理解してもらうために良いタイミングとなる。

○育ちの記録

- ・一人一人が遊びを通してどのような経験をしているのか、その中で生み出された姿をしっかりと理解して丁寧に記録にとっていく。
- ・保育現場に留めるのではなく、家庭や地域との連携という視点で発信していく。
- ・今日、「開かれた教育課程」が求められている。幼児教育が無償化となり、教育費・保育料が税金で賄われている部分もあるため、幼児教育の重要性、遊びを通して学んでいることを伝えていく必要がある。
- ・保育記録を書くことは、保育を振り返り、子どもの行動を意味付けることになる。保育ドキュメンタリーやポートフォリオ等を職員間で共有し、子どもたちについて語り合う時間や場を確保していく。様々な視点から意見交換ができると、いろいろな見方で子どもたちの学びを見ることができる。
- ・ホームページ等で子どもたちの育ちをオープンにすることで、家庭や地域に園の取組みや教育・保育への理解をしてもらうことにつながる。

○家庭や地域との連携

- ・地域の人材を保育に生かしていくこと。
- ・保育者として、親として子どもの育ちを喜びあえる関係づくりをしていくこと。
- ・「目に見える姿から何が育ちつつあるのか」について、家庭のみではなく地域にも発信していくこと。これらを行っていくことで様々な意見を取り入れながら、より良い教育・保育を行うことができ、組織的に主体的・対話的で深い学びの実現につながる。

